

<編集後記>

生物多様性と自然生態系の行方

生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）は、おおかたの予想をいい意味で裏切り、遺伝資源の利益配分をめぐる名古屋議定書、生態系保全のための世界目標、遺伝子組み換え生物の補償に関する補足議定書といった大きな3つの課題が採択され、閉幕しました。今後、地域での視点と取り組みがより一層必要であることは間違いないと感じますが、6月号発刊から今号までのわずか半年の間にも、京都、大阪、奈良で急激に進行したナラ枯れ（コナラ以外にツクバネガシやコジイなどにも被害が発生）、人里でのツキノワグマ出没、滋賀県朽木のトチノキ巨木大量伐採など、生物多様性あるいは生態系劣化に関連する多くの問題に直面しました。

KONCの取り組みとして、2010年6月6日に大阪市立自然史博物館で開催されたシンポジウム「わかったつもりを問い直すー生物多様性って何？」において、湯本貴和氏（総合地球環境研究所）と道家哲平氏（NACS-J/IUCN）に興味深い講演をしていただきましたが、その内容を本誌に掲載しています。また、6月27日に実施した成ヶ島（兵庫県洲本市由良）現地見学会では、山西事務局長と和田運営委員（奈良女子大）が世話人となり、国立公園成ヶ島を美しくする会のご案内で、島の植生や海岸生物を観察しました。ハマボウ（アオイ科）の開花にはまだ少し早い時期でしたが、潮だまりの多様な生物、塩生湿地群落のハマツナやホソバハマアカザ、ウミガメの卵などを確認し、楽しく充実した現地観察会となりました。タブノキやホルトノキなどからなる照葉樹林の林床にはカニ類の巣穴が多数あり、森林と海の生物のつながりを感じました。照葉樹林を動き回る真っ赤なアカテガニはとても印象的でした（観察会の詳細報告についてはKONC NEWS最新号をご覧ください）。11月10日には、「信太山の自然環境と生物多様性の保全」に関する要望書が石井会長から和泉市長に手渡されました。信太山のシンポジウムおよび本誌掲載記事が信太山の環境保全につながることを期待してやみません。

さて、本号は、シンポジウム特集、原著論文、短報、報告、書評など多彩なコンテンツとなりました。シリーズ第13回目となる「自然へのアプローチ」は、河川生態系保全の研究を進めておられる大阪府立大学谷田研究室の若手研究者についてご紹介いただきました。表紙は人と自然のかかわりから、湯本氏が新年にふさわしい福寿草の写真を提供してくださいました。本号でお世話になったすべてのみなさまに感謝いたします。2011年も本誌へのご投稿・ご寄稿をお待ちしています。

（前迫ゆり）

